

葬送行進曲

野村胡堂

青空文庫

呪われた名曲

「どうなさいました、貴方^{あなた}」

若い美しい夫人の貴美子は、夫棚橋^{たなばし}讚之助の後を追って帝劇の廊下に出ました。フランスから来た某という名洋琴^{ピヤニスト}家の演奏が、今始まったばかりと云う時です。

「とても我慢が出来ない、あの曲は俺に取ってはヒドク不吉なんだ」

「マア——」

シヨパンの「葬送^{ヒューネラル・マーチ}進行曲ソナタ」を第一楽章だけ聴いて飛出すのは、随分乱暴な態度だとは思いましたが、美しい夫人は別に逆らおうともせず、玄関前の大きい丸椅子^{いす}の上へ夫と並んで深々と身体^{からだ}を埋めました。

「あの曲を聴くと碌^{ろく}な事は無いんだ、一応プログラムを見て来るとこんな馬鹿な目に逢う筈^{そもそも}は無いが、まさか初日のプログラムに、あんな曲目を出す筈^{そもそも}が無いと思つたのが仰々^{そうそう}の間違^{あやま}りさ」

棚橋讚之助は葉巻ヘライターを鳴らして、享樂的に紫の煙を吐き乍^{なが}ら、夫人を相手に、

それでも心持声を潜めます。

三十七八の、実業家らしく脂の乗って来た風采ですが、年にも風采にも紛らせない、坊ちゃんらしいところのあるのは、苦勞知らずに先代の仕事を承継いで、伝統と暖簾のれんと忠実な支配人のお蔭で、素晴らしい儲けを黙って受取って居られる身分のせいもあつたでしょう。

充分に若くてハイカラで、妖艶な感じのする夫人は、良人の頑固おつと かつくなな態度が心憎いと思つた。う様子で、クツションの上を摺り寄つて、男の丸々と肥つた膝に、華奢きゃしゃな片手を掛けました。

「あらそんな、大きい声をなざると、中へ聞えますワ」

「併しかしそんな事を言うのも、決して根拠の無いことでは無いんだ、知つての通り、仏滅も鬼門も担がない俺だが、何どうしたものかあの葬送行進曲ヒューネラル・マーチだけは恐ろしいよ」

「どんな事がありましたの？」

「気味も悪くもあるが、充分好奇心を動かされたらしく、良人の顔を仰いで、いつも物強ねだり請をする時のように、大きい眼を細めて少し受け口の唇を歪めます。」

「笑つちやいけないよ——」

讚之助は、もう葬送^{ヒューネラル・マーチ}進行曲^おを了えて華やかな第四楽章のプレストに入ったらしい音を遠音に聞き乍ら、場所柄を超越した香気^{のんき}で話し出しました。

「俺の学生時代には、レコードに入つて居るパツハマンの弾いたあの曲は不吉だと言われたものだ。俺の経験から言つても、あのレコードを買つた翌^{あく}日の晩母に死なれたのを手始めに、あの曲のレコードを掛けて聴^ごく毎に、何んかしら不吉な事が一つずつ起るんだ、全く不思議だつたよ」

其^{そこ}処まで言つて讚之助は、フツと言葉を切りました。

「まあ」

「最後に——之は話して宜^いいか悪いか分らないが、隆の母——話^{これ}に聞いたろうが之はピアノをよく弾いた——それが生きて居る時好んで弾いたのはあの曲だつたよ、それからまだある——」

話は思いの外真剣になつたので、貴美子夫人も美しい眉をひそめて、寒々と良^{おつと}人の側に寄りました。二十四五とも見えますが、何んとなく華奢な体質で、地味ではあるが贅^{ぜい}沢^{たく}な総模様を縫つた羽織が、ソロリと肩を滑り落ちそう、何んか紙人形のような感じのする弱々しさです。

「もう沢山——怖いワ」

「あと、たった一つだ——五六年前、家へ大勢の客をした時、その客の中に交って居たピアニストの石井と言うのが、一曲所望されて弾いたのがあの曲だった。その時は何んとも思わなかったが、翌る日父が心臓麻痺を起して死んだ」

「厭ですわねえ」

「だから俺はあの曲が恐ろしいと言うんだよ。あんな美しい曲は無いが、何うも凝つとして聞いては居られない」

そんな話をして居るところへ、第一部が済んだらしく、猛烈な拍手に追い出されるように、八方の入口から聴衆の大量が廊下へ流れ出して来ました。

「何うしたんだ。途中から抜け出したやんかして」

遠くの方から二人を見付けて、揉み合う盛装の男女の間を摺り抜けるように近づいたのは、讚之助と同年配の美しい髭のある男、貴美子夫人の兄で、酒巻四郎というドクトルです。

「あの曲は不吉で嫌いなんですって——」

先走る貴美子夫人の口を押えるように、

「そんな人聞きの悪い事を言っちゃいけない——昨夜遅くまで麻雀を付き合つて、寝が不足のせいだろう、頭痛がして敵わないんだ」

「それは惜かつたネ、素晴らしい葬送行進曲だったよ。山北さんなんか、ポロポロ泣いて居た——」

「あら先生、泣いたんでは御座いません。眼が痛かつたんで御座いますよ」

家庭教師の山北道子は、十二三になる弱そうな少年——讚之助の先妻の子で、たった一粒種の隆——と一緒に其後から人混みを抜けて近づきました。

山北というのは、三十二三の未亡人らしい淋しい婦人で、悲しみの為か人造人間のよう
な硬い表情をして居りますが、そのくせ、包んでも包んでも、包み切れないと言つた、妙に魅惑的な、ぞんざいに扱つた宝石のような感じのする女です。併し刻みの深い顔はお面の
ように冷たく、額が少し抜け上つて、軽い跛を引く恰好などは、何う讓歩して考えても、
決して美人ではありません。

「山北さんは眼なんか悪いんじゃない、矢張り泣いてたんだよ」

「まあ、お坊ちやま」

賢くそうな少年を抱え込んで、父親の側へ割り込ませ乍ら、家庭教師はさすがに顔を赤

らめます。

「ピアノで泣くのは珍らしい——義太夫を聞くと、山北さんなんか眼をまわす方ですなハッハッハッ」

「まあ」

良人おっとの無遠慮な高笑いを取りなすように貴美子はやさしく家庭教師の方を振り向きました。黒装束の淋しい姿、少し肩の曲った醜い恰好などを見ると、顔に何んか魅惑みじんらしいものが残って居るにしても、神経質な夫人に嫉妬らしいものを感じさせる点は微塵みじんもありませんでした。

疑問の死

棚橋讚之助の予感は見事に当りました。

一粒種の隆は、翌ある日の朝、自分の寢室のベッドの上に、冷たい死骸になって見出されたのです。

「旦那様、お坊ちやまが、お坊ちやまが——」

と寢室の扉ドアを叩く音に驚いて、寝巻姿パジャマの讚之助が飛出すと、廊下の絨毯じゅうたんの上に崩く折ずおれた家庭教師の道子は、その不思議に刻みの深い顔を硬張こわばらせて、涙も無く泣きじやくつて居りました。

「何どうしたんです？」

「お坊ちやまが、冷たくなつて在いらつしやいます」

「何？」

讚之助は素足で梯子段はしじを飛下りて、隆の寢室へ飛込みました。寢室ベッドの上に安らかに瞑目して居た愛児の死骸は、父の手にも最早揺り起しようがありません。

「隆、隆ッ」

額へ、頬へ、肩へ触った手を、その恐ろしい冷たさにゾツとして引込めると、其儘そのま寢室ベッドの側に寝巻パジャマの膝を突いて、讚之助は男泣きに泣き入りました。一人ツ子と言うばかりでなく、この十三になつたばかりの繊弱ひよわい子の裡うちには、十年前に別れた先妻の忘れ難いおもかげが残つて居たのです。

暫しばらくして顔を上げると、寢台ベッドの向う側にすがり付いた家庭教師の山北道子が、これも身も浮くばかり泣き入つて居ります。雇入れてからたった一年にしかありませんが、この

女の教え子に対する愛情は不思議な位で、時々、子煩悩ぼんのうな讚之助が嫉妬をさえ感ずる程でした。

そのうちにこれはさすがに寝巻だけは着換えた貴美子がアタフタ飛込んで来ました。

「隆さん、何うしたんでしようね、可哀想に、隆さん」

寢台ベッドの前に廻った夫人は、その華奢な手を少年の蒼白い額に当てましたが、恐ろしい死の冷たさに脅えて、ゾツとした様子で引込めてしまいました。

電話で呼んだ酒巻ドクトルが、自動車で駆けつけてくれたのは、それから十分とも経つては居ませんでした。悲歎に暮るる人達を遠退とわのけて、丁寧に診察しましたが、病気は心臓麻痺、死亡時間は夜半の二時頃、という以上には何んにも判りません。十三歳の少年が夜中に寢台ベッドの上で心臓麻痺を起すのは不思議と言えば不思議ですが、外に病名の付けようが無いとすれば、それを信じないわけに行きません。それに、日頃虚弱で、腺病質の見本見たいな子でしたから、夜中に急死したと言っても、誰も疑を挟むものはありません。

子供の事でもあり、翌あぐる日は告別式を済ませ、その日の夕刻、直ぐ火葬場へ持つて行くことになり、十三歳になった一つの生命いのちの始末が、何んのこだわりもなく、トントン拍子に片付いてしまいそうに思われましたが、その日の夕刻、思いもよらぬ事件が起つて、こ

のプログラムがすっかりこわされることになってしまいました。

それは、所轄警察署から、一応死骸を検屍けんしさして貰たい度たいと言って、司法主任と刑事二人、警察医を伴つれてやって来たのです。

父親は名誉も地位もある実業家で、酒巻ドクトルの死亡診断書にも手落は無かった筈です。通例こんな事は無いのですが、何分所轄署へ重大な密告書が、速達郵便で舞い込んで来たので、其儘捨て置くわけには行かなかつたのです。

密告書は通常の安用箋へ郵便局備付の墨汁で書いた物で「柵橋讚之助の一子隆の死亡は、他殺に相違ない。火葬にする前に一応検屍しなければ、重大な手落になるだろう」と言った文句が、少し乱暴な字ではあるがかなりの達筆で書いてあつたのです。

併し警察医の丁寧な検屍も、結局は何んの得るところもありませんでした。死体には鵜うの毛で突いた程の外傷もなく、鬱うつけつ血も、斑はんもん紋も、苦悶の跡も無いばかりでなく、毒物で殺したという疑も絶対にありません。反対に酒井主治医の説明で、日頃肺門淋りんばせん巴腺ばせんが腫しゅちよう脹ちようして居たことや、胃腸の弱かつたこと、ヒポコンデリーの症状のあつたことなどが解つて、警察医も心臓麻痺という以外には、判断の下しようが無くなつてしまいました。

「此この上は解剖して見るんですね、併し解剖しても恐らく無駄でしょう」

警察医が斯んな事を言うのですから、まるで問題になりません。

「密告書には何うかすると、筋の悪いのがあるからなア」

司法主任も甚だ気が乗りません。

念の為、家族全部を調べて見ましたが、疑われるような人は一人もありません。音楽会の帰り、此処まで一緒に来た酒巻ドクトルは、暫らく無駄話をして十一時に立ち去り、主人讃之助夫婦は、それと同時に寝室に引取りました。

家庭教師の山北道子と隆少年は、それと前後して自分の部屋に引取り、隆少年は直ぐ寝室に入ってしまった。尤も疔が昂ぶって寝付けない事があるので、家庭教師と隆少年の寝室は別で、夜中でも用事があれば呼出せるように、少年の枕元には呼鈴が備え付けてあります。

讃之助は実によく眠って何んにも知らず、夫人の貴美子も一歩も寝室も出なかつたと言つて居ります。隆少年の隣室に寝て居た、山北道子も不思議によく眠つたそうで、これも何んにも知つては居ません。讃之助が隆少年を愛して居ることは眼に余るほどで、貴美子夫人も、自分に子が無い関係か、この継子を親身に可愛がつて居ります。山北道子の可愛がりようは又法外で、母親より乳母の方が愛情が濃やかな事があるように、此家庭教師も、

親身になって教え子を育てて居りました。あとは雇人ばかり、鍵は無かったにしても、主人の子供の寝室へ、夜中に入り込む者などがある筈ありません。

他殺か病死か

所轄署の方はそれで済みましたが、翌日は検事局と警視庁へ同じ密告書が配達されました。その文面は大同小異ですが、非常に嚴重な口調で「主治医の出鱈目でたらめな診断書を信用して、解剖もしないというのは重大な手落ちだ。死因の判らないような巧妙な殺人は、決して少くない」と法医学上の有名な例まで挙げて、手厳しく捻じ込んであります。

斯うまで筋が立つて来ると、一片の密告書も放つては置けません。即刻火葬を差し止めて、翌あく日解剖に付しましたが、さてわかりません、

外傷が一つも無いことは前にも見た通り、外国の犯罪に、耳の穴へ拳銃ピストルを撃ち込んで、血を拭き取つて居た為に、どうしても死因が判らなかつたというのがありますが、全身解剖をしたのですから、そんな事が判らない筈ありません、毛際から小脳部へ針を刺したという例もありますが、もとよりそんな痕跡もありません。

注射——猛烈な毒物や、空気の静脈注射と言うことも考えられますが、全身の皮膚は剥いたゆで卵のように綺麗で、蚤のみに蝨さされた痕あとも見付かりません。胃の内容も極きわめて念入に調べましたが、毒物の痕跡などは爪の垢ほどもなく、そうかと言って、病気で死んだと言ふほどの証拠も掴まれました。なるほど、酒巻主治医の言うように、肺門淋巴腺は著しく腫脹し、胃腸も弱つては居りますが、浸出性体質の虚弱な少年であつたというだけの事で、今が今死ぬというほどの病気は一つありません。

「成程なるほど。心臓麻痺とでも言わなければ——」

執刀の博士もすっかり投げてしまいました。

「絶対に他殺と見ることは出来ないでしょうか」

助手の学士が怪訝けげんそうな顔を挙げると、

「たった一つ疑えば疑える点がある——が、それは考えられない事だ」

そう言った切り、博士は口を緘つぐんでしまいました。

併し事件はそれだけでは済みません。

家庭教師の山北道子の寢室にある水差し——あの騒以来、うっかり水を換えるのを忘れて居た水差し——の中には明瞭に識別される程度の、かなり濃厚な催眠薬が交って居るこ

とが発見されました。山北道子に聞きましたが、そんな事は一向知らないと言いますし、毎晩鎮痛剤の持薬を呑んで寝る習慣であるのを知って、夜中家庭教師に目を覚まさせない為に、水差しの中へ催眠薬を投入した者のあることは疑いありません。

と言ったところで、それだけの事です。解剖の結果隆少年の死が他殺で無いと決定すれば、それ以上調べたところで何になるものでしょう。

警視庁と検事局へ、それから幾通も幾通も密告状が舞い込み「——隆少年の死は他殺に相違ない。あれを放つて置くのは怠慢だ」と言つて来ましたが、死んだ人の近親者などには、悲歎のあまりよく単モノマニア一狂になる事もあり、又誰かに怨うらみのある者が、柄えの無いところへ柄を上げて、何んにも知らぬ第三者を陥入れようとする事もある例ですから、警察も検事局も、まるで相手にしません。

父親、棚橋讚之助と家庭教師山北道子の悲歎は、見る眼も気の毒なほどでしたが、日が経つにつれてそれも次第に薄れて行きます。それに夫人の貴美子は悲しんで傷まずと言つた態度で、よく夫を慰めたせいもあつたでしょう。もう一つは健康で事業欲さかの旺さかんな讚之助は、忘れるともなく隆少年の事を忘れる時間の方が多くなつて行きました。

教え子が死んで了しまえば、当然家庭教師の山北道子に用事が無くなつて了しまいます。そのま

ま備い続けて、ハウス・キーパー家政婦になつて貰もうと言う話もありましたが、まだ老い朽ちたと言
う年でもなく、妙に魅惑的な黒装束の年増振りが、貴美子夫人の神経の為にもよくなかつ
たので、隆少年の四十九日が過ぎると、一応解雇することに決定してしまいました。

恐ろしい記憶

「あッ。誰だッあんな曲を弾くのは？」

外から帰つて来た主人の讃之助は、自動車から飛降りると思わず玄関どなへ呶鳴り込みまし
た。

隆少年が死んで五十日目、昨日きのう中陰を済ませたばかりの家の中から、存分に叩くピアノ
の音が、玄関の外までも凜々と響いて居るのです。しかも曲は因縁付きのシヨパンの「葬ヒ
送ユ行進曲」讃之助が思わず自分の家へ呶鳴り込んだのも無理はありません。

「お帰り遊ばしませ」

出迎えた女中達は、主人の以てもつの外の機嫌に、少しおどおどして居る様子。

「奥さんは何どうした」

「——あの歌舞伎へ入らっしゃいました。今日はお坊ちやまの忌明けだから、久し振りでお気保養に行つて来る、旦那様は会社の方から直ぐ木挽町へお廻りになる筈だからと仰しやいまして——」

主人の不意の帰宅に怪訝な顔をし乍らも、女中頭らしい年配の一人は、弁解らしく斯う言います。そう言われれば成程二三日前から、貴美子がそんな事を言つて居たようでもあります。それにしても腑に落ちない事があります。

「山北さんから会社へ電話が掛つたんだ。奥様と御一緒に申上げ度い事があるから直ぐお帰りになるようにつて、可怪しいねえ——山北さんは何うしたんだ」

「お二階でピアノを弾いて在つしやいます」

女中頭は、家庭教師の出過ぎた仕打ちに不平があるらしく、ひどく角目立つた物の言いようをします。

「何？ 山北さんが。あれが山北さんか？」

讚之助は全く驚いてしまいました。家庭教師の山北道子がピアノを弾くと言うことは、想像もしなかつた事で、しかも此処から聴いた様子では、余程の玄人です。夫人の貴美子は勿論のこと、隆のピアノの先生だった人も、とてもあれだけには弾けません。

それにしても、此家に取つては何より不吉なシヨパンの「ヒューネラル・マーチ葬送行進曲」を弾くとは何んと言う心持でしょう。

「お前達は二階へ来るな」

讚之助は何んかしら重大な心持になつて、外套と帽子をかなぐり捨てると、深い絨毯を踏んで二階へ昇つて行きました。

大広間の扉ドアを細目に開けて、ソツと覗いて見ると、贅沢な調度を照して、中は一パイに流るる夕陽ゆうひ、その中にひたり切つて、窓際のグラウンド・ピアノを叩いて居るのは、家庭教師の山北道子の後ろ姿です——が、何んと言う変りようでしょう。

この家を今日が名残りなごと思つたのか、日頃の黒い洋装を捨てて、十年位前に流行はやつた裾模様こだいぎれに古代帛こだいぎれを散らした小浜の紋付に、黒地に山桜を織出した西陣の丸帯、襟足を見せ、少し古風な根の高い束髪ゆに結つた後ろ姿は、今までの山北道子とは、まるで違つた心持があります。

棚橋讚之助は、何かなしギョツとして立ち止まりました。この女には見覚えがある。山北道子としてではなく、もつともつと古くから知つて居る女に相違ないということ、はつきり覺らされてしまったのです。

第一この古代帛を染出した古風な小浜縮緬ちりめんの紋付にしても、黒地に山桜を織出した、変った好みの帯にしても、讃之助にしては決して昨今初めて見たものではなく、日頃あまり触れずに置いた、古い古い下積になった記憶——そのくせ一番生々しい深刻な記憶の中にある幻だったのです。

「葬送行進曲ヒューネラル・マーチ」は終りに近づこうとして居ります。その特異なアクセント、啜り泣くような実感的な哀愁、冥途よみじの妖鬼の叫びを思わせる物凄い表情は、忘れようとして忘れることの出来ない、讃之助の古い記憶を揺り動かします。

そればかりではありません。夕陽を一パイに受けた女の美しい首筋の曲線から、左の耳みみたぶ朶の後へ辿って行くと、讃之助の眼は大変なものを見付けてしまいました。有るか無きかの小さい小さい赤い黒子ほくろ。

「あッ」

それを見た時は、さすがに讃之助も、愕然として声を立ててしまいました。

紅玉石ルビーの如く赤く、焰の如く燃える黒子ほくろですが、あまりそれは小さかったので、山北道子風に首筋で髪を束ねて居れば気が付くわけではなく、夕陽にでも照されなければ、根の高い束髪に結って居ても黒子ほくろは見えもしなかつたでしょう。

完全な変装

女は、讚之助の声に驚いて振り返りました。珍らしく薄化粧をして居りますが、淋しく笑うと深々と笑靨の寄る頬を見た丈^だけで、讚之助の記憶も幻想も微塵^{みじん}に打ち砕かれてしまいます。この女は、どう考えても昔讚之助と交渉のあった女ではなく、たった一年前から、死んだ隆少年の家庭教師として迎えた山北道子その人ではあり得ないのです。

「貴女^{あなた}でしたか、貴女^{あなた}でしたか——」

「何を驚いて在^{いら}つしやいます」

「イヤ、何んでも無い」

讚之助は付き纏^{まと}う蜘蛛^{くも}の巣でも払うように、額から頬のあたりを搔^かき撫で乍ら、安樂椅^い子の上へドツカと坐り込みました。

「大層お顔色がお悪いようですが」

差し寄る道子を、払い退けて、

「イヤ、もう何んとも無い——貴女^{あなた}の後ろ姿が、私の昔知って居る人に、あまりよく似て

居たので、吃驚びっくりしただけなんだ」

「マア——後ろ姿だけで御座いますか、顔は少しも似ては居ませんかしら」

「少しも似て居ない」

讚之助の口辺には、何やら皮肉な微笑が漂います。

「その方は、私より美しかったので御座いましょう」

「いや——」

と言ったが、讚之助の顔は道子の言葉を無条件で肯定して居ります。

「今日はいよいよお暇いとま申さなければなりません、あまりお名残なごりが惜しいと存じまして、お

留守中に一寸ちよつとピアノを弾かして頂きました」

道子はピアノの前から立ち上って、讚之助の側へ歩み寄ります。

「それは構わない——が、どうして今まであんなにうまいピアノを弾かなかったのです」

「いえ、決してうまくは御座いません、それに——弾くとツイあの曲になりますので、お気に障つてはと存じまして、差控えて居りました」

「と言うと」

「あの弾きようには、いろいろ思い出がとおりの筈で御座いますが——」

「えッ、貴女あなたは何を言うんです」

讚之助はもう一度愕然としました。安樂椅子の凭もたれに手を掛けて、中腰に差覗くと、女の顔は何んと言う冷たさでしょう。その黒耀石こくようせきのような瞳を見ただけで、讚之助の全身は凍り付いてしまいそうです。

「それから私の耳の後ろの紅玉石ルビのような黒子ほくろにも——」

「何？」

「この古代帛を染め出した小浜の紋付にも、黒地に山桜の帯にも、並々でない思い出が
ありの筈で御座います」

「つまらぬ事を言つて脅かしてはいけない、貴女あなたは一体何だ。あの女の何に当るのだ」

讚之助は到頭とうとう立ち上つてしまいました。あやかしを払い退けるように、双腕を振つて女を戸口の方へ追いやろうとします。

「脅かしはしません。よく御覧下さい」

「……………」

女は一步前へ踏み出しました。物悲しくも華やかな春の夕陽の中に、その不思議に冷たい顔、あらゆる情熱を封じ込んで、その上を理性で塗り潰したような顔を曝さらして、

「よく私の顔を御覧下さい、鬢びんの抜け上ったのは、年齢としのせいもありますが、一本の毛抜でいくらでも額は広げられますわねえ」

「……………」

「眉は植毛手術でどんな形にでも変えられることを御存じでしょう。私のこの太過ぎる眉を削って、少し三日月形にしたら、どんな恰好になるでしょう」

「……………」

「一重瞼を二重瞼にする手術は何でもありませんが、眼の色を変えるのは一番難かしいそうです。それでも虹彩へ色素を注入して、茶目が黒目にも、黒目が茶目にもなります。私のこの真つ黒な眼が、もう少し茶色だったらどんなでしょう」

「……………」

「鼻はパラフィンの注入や、象牙ぞうげの嵌かん入にゅうでどんな形にでもなります。私の鼻がもう少し低くて、軟かいカーブを描いて居たとしたらどうでしょう。唇の恰好を変えるのも、歯並を見違えるようにするのも、ほん当に少しばかりの手数です、笑靨えくぼさえ電気針で自由に作られるのですもの——」

そう言つて山北道子は、片頬に深々と笑靨えくぼを寄せて、淋しく微笑みました。

「そんな馬鹿な事が、そんな馬鹿な事が——」

道子の顔を魅入られたように見詰めて居た讚之助は、二足三足よろめくと、卓テーブルの角に片手を支えて、急に戦闘的な調子になりました。

「これほど申上げてもお解りにならないければ——貴方あなたは卑怯です」

「卑怯では無いが、そんな事は断じて信じられない」

「信じられない筈はありません、貴方あなたの前に立つて居るのは、貴方あなたの元の妻で、死んだ隆の母、十年前にお別れした勢子せいこです」

「そんな事があるものか、顔が違う、顔がすっかり違う」

「私の顔は日本とアメリカの整形外科の名医が、手てならい習草紙のようにして造り変えてしまったのです。昔の人の考えた、一時的の生優しい変装では承知が出来なかつたのです」

「いや、嘘だ嘘だ、勢子は死んだ筈だ」

「そうです仰おっしやる通り死んだ筈でした。併し誰も死体を見た人もなく、葬とむらい式をしてくれた人もありません」

「あ、あ、俺は気が違いそうだ」

讚之助は到頭打ちのめされたように、長椅子の上に半身を投げ掛けてしまいました。

ロボットの笑い

「何も彼もお話し致しましょう」

暫らく讚之助の様子を見て居た勢子——山北道子と名乗った不思議な女——は、同じ長椅子の上へ並んで掛けて、打つて変つて静かな調子で斯う始めました。

「私は盜癖があつたに相違御座いませぬ。実業家柵橋讚之助の夫人が、デパートで、常習的に万引を働いたのが見付かつたのですから、離縁になつても、お怨みするどころか、みんな自業自得とあきらめて、せめて手を廻して下すつて、縄付になるのだけでも救つて頂いた御恩を感謝して居りました」

勢子の述懐は、妙にハキハキした事務的な口調のうちにも、隠し切れない物悲しい調子がありました。讚之助の何んと返事をして宜いか、迷い抜いているような顔を、物悲しく顧みて、委細構わず続けて行きます。

「私は死んだと言う噂を撒き散らして、実はアメリカへ渡りました。それから八年間、あちらで何んなに骨を折つて勉強もし、働きもし、それから顔や形や声までも変えることに

骨を折ったことでしょう。この通り私の顔を変える為に、近代の整形外科の出来る限りの事をした上、薬品で声帯を腫らして、ソプラノの声をアルトに変え、身体からだの恰好を違った心持にする為に、右足の腱を切つて、わざわざ跛びつこにまでなりました」

何んと言う恐ろしい変装でしょう。此処ここまで行けば、変装と言うよりは破壊です、更生と言つても宜よいでしょう、讚之助はこの変り果てた、昔の妻の姿を見て、声も無くただ舌を巻くばかりでした。

「私は隆の事が気になつて、どうにも我慢が出来ませんでした。それに久し振りで貴方あなたにも一度お逢いしたかったです、——家庭教師を探して居るといふ話を人伝ひとつてに聞いて、あらゆる運動をして、到頭此家に入り込んだのは其為そので御座います」

子供に逢い度かつたと強調しては居りますが、勢子の未練は昔の夫の讚之助の上にも充分に残つて居たのでしよう。長椅子に押し並んで掛けた身体からだは、兎もすれば讚之助の方へ摺り寄つて、盲目的に犇ひしとすがり付きそうな衝動に悩まされて居る様子がマザマザと見え
ます。

「それからの事は申す迄までもありません。昔私の占めて来た地位は、あの貴美子夫人が占めて、私などはもう寄付けそうもありません。せめて自分の腹を痛めた隆が、本当の母とも

知らずに、盲目的な本能に引摺ひきずられて、私になつて来るのを慰めに、この一年間は無事に過ぎました。この儘ま隆が殺されさえしなければ——」

「オイオイ、待ってくれ。お前は隆が殺されたと思つて居るのか」

驚いて起き直つた讚之助の言葉は、何時いつの間にもやら昔の夫のそれに返つて居ります。

「え、え、誰が何んと言つても、隆は殺されたに相違ありません。母の私が、本能で嗅ぎ出したんですもの」

「そんな馬鹿な事はあるまい、警察も、酒卷君も——」

「そんなものは当あてになるものですか」

勢子の鋭い声音です。

「何どうして隆が殺されたと言うんだ。俺も隆の親だ、もう少し詳しく話してくれ」

「警察にも検事局にも、幾度も幾度も注意して、あの通りですもの、此上は私が自分で隆の敵を討つより外はありません。私は五十日間、夜の目も寝ずに研究して、漸ようやくこの秘密を突き留めたのです」

「え？ それはどう言う意味だ、話してくれ」

「隆は矢張り殺されたんです。あの晩、私に催眠薬を飲ました犯人は、貴方あなたにも催眠薬を

飲まして、恁々ゆうゆうと隆を殺して、何食わぬ顔をしてすまして居たのです」

「誰だ、それは？」

讚之助は、半信半疑乍ら少し気色ばみました。盜癖があつて離別したにしても、この勢子と言う女の異常な精神力や、根強い研究心を知つて居るだけに、斯う言われると真剣に訊いて見度くなります。

「それは後でお話しましょう——隆の死因が、毒物でなく、刃物でなく、注射で無いとすれば何んでしょう？ あんな気の弱い子はひどく脅かした丈けでも死ぬことがあるそうですが、死んだ隆の表情は極く穩ごかで、脅かされて死んだものとはどうしても思えません」

「……………」

「私はいろいろ考えました。本も読み、人にも聴きました——最後に私の遠縁の甥の、若い医学士を訪ねて大変な事を教えられたのです」

「……………」

恐ろしい圧迫感に、讚之助はコックリと咽喉のどの奥を鳴らしました。

「——浸出性体質の人、つまり副交感神経の過敏になつて居る人は、或方法で或部分を圧迫すると、迷走神経の作用で心臓の働きが止るんだそうです。詳しいことは危険だからと

言つて教えてくれませんが、この実験を発表したドイツ人のアッシュネルという人は、この方法で一人死んだ例が有ることを報告して居るそうですし、日本の実験例にも、医者が危うく患者を殺し損ねた事があるそうです」

勢子はそこで言葉を切りました。

「……………」

恐ろしい沈黙。

「隆は申すまでもなくあの通り浸出性体質の見本のような子で——その上変な事には、酒卷さん——貴美子夫人の実兄の酒卷ドクトル——が神経衰弱の診察をするんだとか言つて、大分前から、隆に目隠しをさせたり、腕に引つ掻きをこさえたり、いろいろ変な事をやつて居ました」

「そんな事は無い、嘘だ、酒卷君は紳士だ。——隆を殺すなんて」

「イエ、私は酒卷さんが殺したとは申しません」

「すると誰だ、誰が隆を殺したと言うのだ」

「酒卷さんは、心臓麻痺と言う診断書を書いただけの事なのです」

「誰だ、誰だ」

讚之助が物凄まじい亢奮こうふんに囚とらえられると、勢子は反対に益々冷静になって行きます。

「お目にかけてみましょう、その犯人を」

「サア見せてくれ」

「その前に」

「その前に何んだ、何が入用だ」

「私の手柄に酬いて下さるでしょうね」

「それは酬いる、何が望みだ」

「愛情、昔のような」

「馬鹿なッ」

払い退けようとする讚之助の首に、サツと飛付いた勢子は、双腕を巻いて――。

「エッ、何をやる」

と言ったが及びません。

妖艶な年増の魅力は、この一瞬間に蘇返って、造り変えた人ロボット造人間のような不気味な顔にも、火のような情熱と、不思議な美しさが咲き乱れます。

「エッ離せッ」

「もう沢山、これ以上、どうしようとは申しません。サア、入らっしゃい、隆の敵、――恐ろしい殺人鬼の姿を見せて上げましょう」

讚之助は不思議な興奮の中にも、恐ろしい期待に顫ふるえて勢子に従いました。一度廊下へ出て、真っ直ぐに三つ目、左の扉ドアを開けると讚之助の書齋です。

――

勢子は黙って入って、向うを指して居ります。

見ると、室の隅に置いた安楽椅子に凭れて安らかに眠って居るのは、讚之助の愛を一身に集めて居る美しい貴美子夫人の盛装した姿です。

「何んだ貴美子ではないか、まさかお前は？」

「驚いたでしょう、あの女ですよ、あれが隆を殺した相手なのです」

「そんな馬鹿な事があるものか、これ貴美子」

奮然とした讚之助、近づいて貴美子の額に触ると、氷のよう。

「あ、死んで居るッ」

「ホ、ホ、ホホホホ」

物凄いロボットの笑いが、夕闇迫る書齋の空気に突っ走ります。

「お前だろ、殺したのは」

カツとして飛び付こうとすると、早くも身をかわして、扉ドアの外へ。

「お察しの通り——仕合せな事にその女も浸出性体質で、ほんの少しばかりの手数で死んでしまいましたよ」

「悪魔、悪魔、待て」

「死亡診断書はその女の兄の酒巻ドクトルが書いてくれますよ、——心臓麻痺と——」

「悪魔」

中では讃之助、扉ドアに飛び付いて開けようとしたが、外から鍵を廻したので、何どうするとも出来ません。

「左様なら、私は貴方を愛し続けて死ぬでしょう。悪く思わないで下さい、本当の悪魔は、其そこ処こに死んで居る美しい若い女の方なんです、左様なら」

涙にかすれた声が、次第に階段の方へ消えて行きました。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂探偵小説全集」作品社

2007（平成19）年4月15日第1刷発行

底本の親本：「踊る美人像」愛翠書房

1949（昭和24）年2月

初出：「文芸倶楽部」

1931（昭和6）年4月増刊

※表題は底本では、「葬送行進曲〈ヒューネラル・マーチ〉」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葬送行進曲

野村胡堂

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>